１９８７年度（昭和６２年）３月№３０

子どもに

中学生の読書に思う

山手中学校教諭　山本　艶子

「本が読みたい」というのはどんな時でしょうか。

一つは手探りで何かを求めている時だと思います。

また、特に目的はないが、おもしろそうだからという読書もあると思います。

ところで、今の中学生を見ていると、読書は嫌いではないようだけれど、とにかく、あまり読書をしていないのが現状です。

模索する必要のないほどにレールが敷かれ、それに乗っかっていけばいいようにお膳立てができているからでしょうか、早朝練習、授業、放課後の部活、塾、ほとんどの子が、こんな忙しい日課をこなしています。解決方法を見つけようと本の世界をさまよわなくてもいいほどに回りから手がさしのべられています。

それに、今の子どもたちは回り道をして考えることが、あまり好きではありません。

即答、即決を好むようです。人の話を聞いたり、本を読んだりして、それを自分のことにあてはめて考えたり、敷えんして考えるということより一問一答式の明快な解決法を好みます。こういう傾向も、本の世界から遠ざかる一因でしょうか。

なんだか悲観的なことばかり書きましたが、しかし、子どもたちは本が嫌いではないのです。たまに図書室で、読書という時間をとりますと、どの子も喜んで本を読みます。未知の世界、楽しい世界をさまよっている子どもたちの目は輝いています。

今年は図書室の移転などであまり活動していませんが、図書室を充実して、一人でも多くの子が本とのふれあいの時を持つようにしなければと思います。図書室を魅力あるものにするという環境整備とともに、一方で本を求める心を育てたいと思います。

「真剣に生きる」ということは、本を求める第一歩だと思います。何事にも真剣にとりくんでいけば、ぶつかることも多く、それを解決したり、癒してくれるものを求めるとき、本は無言で手をさしのべてくれます。

読書の感動が余韻として、心の中にある間は、語りかけてくる友を得たような喜びに浸れるものです。読書によって得た本の友と会話をする時、また、読書の内容をたえず反すうしている時は、心豊かで落ちついた時間です。

「本を読んでよかった、また読もう」という生徒が一人でも増えるように啓蒙していきたいと思います。

心豊かな子どもに成長するうえで、読書は欠かせません。

「子どもと読書」ということで小・中学校の先生、及びお母さん方に原稿をお寄せ戴きました。

今、小学校では

海蔵小学校教諭　鈴木　蕗子

管理棟の二階・三階からトントンという軽い音が聞こえてくると、ついて足を運んでしまう。そこには白い部屋が待っている。この二つの白い部屋こそ低学年、高学年図書室であり、もう完成間近である。

工事のため、一月から閉館になっている高学年図書室、読書の心が一時、途絶えていくという不安からやるせない思いもしたが、このごろでは白い部屋での読書風景を想像するだけで楽しくなってくる。

一方の低学年図書室は、一、二年の児童でひしめき合っている。毎朝、六十人位の児童と対面する。その児童達は楽しそうに本をかかえながら館外へ出て行く。つい、その後姿を追いかけてしまう。

「あの子は『いつ』『どこで』『だれと』『どのようにして』読書するのだろうか」と…。

一年生では、毎日「本の紹介」の時間を設定している。二十人余りの児童がミニステージに上がり、本の題名などを紹介する。聞く方も真剣である。ちょっとでも感想などを入れたりすると、「よし、明日、その本を借りよう」という気分が作られる。

担任が本に対するしぐさを見せると、立ち所に児童は本のとりこになってしまう。

今年の六年生の図書委員はよく仕事をしてくれる。係としての責任だけでなく、本に親しませたいという親心もある。委員会だより、図書館だよりの翌日は、児童で館内はよくふくらむ。これは読書の心がゆさぶられたのである。

どんなものでもゆさぶりが大事であると思う。これは、家庭読書にも引用されるのではないだろうか。

十一月に校内読書月間を設け、七つの柱立てを作り行動化していったその中で、親子読書があった。調査の結果、二百七十五という数字が生まれた。すばらしいことである。

あるクラスの授業を見せていただいたことがある。その時、ある児童の音読がすばらしかった。今でも鮮明にその声が聞こえてくるようだ。これは親子読書の効果がはっきり示してくれているという担任からの声だった。「見えない学力」はここで生きている。

今、一年生は映像的思考から言語的思考へと移行してきている。他学年も乱読から味読へと変わりつつあるのではないだろうか。従って良書への挑戦が「子供に真の読書の喜び」を与えることになると思う。

読書の楽しさを

子どもと読書

小学生を持つ母親

大人の側の言葉に「今の小学生はテレビやゲームに夢中で、本を読まなくなった。読むものはマンガばかり……」というのがあります。しかし私達も子供の頃、外で遊んだり、色々のゲームを考えて集団で遊ぶことの方が多かったものです。今の子供に限って読書が少ないということはないと思います。

子供に対して家庭の中で、読書とはどんな意味を持つのでしょう。親も読んでない本を子供に読め、読めと言っても、子供は本ぎらいになるだけです。

私の家庭では、夫婦、親子の間で色々と話をする機会が多いのですが、私達が小さい頃読んだ作品の話をしますと、子供は大変興味を示します。また、一緒に書店に出かけると、表紙の美しい本、題名のおもしろい本に先ず目が向くようですが、これも大人の都合のみで変えさせてしまうのはどうでしょうか。

テレビにしたって、文芸作品を見て感動し、そこから書物に慣れ親しむ者もいるに違いありません。

しかし、子供にとって現在の家庭生活は、ぼんやり過ごせば時間はどんどん進みます。時間に流されず、たまにはストップさせて、文字を自分の目でつかみ、想像の世界に入り込むことを、感性豊かな小学生時代に是非とも経験させたいものだと考えております。

大切な読み聞かせ

園児を持つ母親

先日保育園で、児童文学作家・北村けんじ先生の講演を聞く機会がありました。その中で、ソ連では「詩を子守歌として歌う」とのお話に大変感動致しました。

私達も幼い頃、祖母が、母が子守歌をよく歌ってくれ、また童謡も口ずさんでくれたものです。今、子をもつ母となってみて、我が子に子守歌をうたうことが少なくなった様な気がします。

歌と同じで、読書も幼い頃から母の声で読み聞かされていれば、自然と本好きになるでしょうね。

読書は学習ではなく遊びであり、楽しくなければならないこと、とのお話でしたが、本当にそうだと思います。親はついつい学習と結びつけてしまい、難しい本を読めば頭がよくなると考えがちです。

でもこれでは本当の楽しさが湧いてこないですね。

本は言葉を豊かにし、創作力を養い、果てしない夢を広げてくれると思います。でもその様な楽しさを味わうのは、やはり母の暖かい肌のぬくもりとやさしい生の声である事を北村先生はお教え下さいました。

あなたの力をお貸し下さい

――海蔵文庫の充実にむけて――

「沢山の子どもたちに沢山の本を読んでもらいたい」「楽しく親しまれる文庫としたい」こうして開設された海蔵文庫も、早いものでやがて十二年を迎えようとしています。

さて、東京の伊藤忠記念財団では、青少年育成活動の一環として、子ども文庫への助成事業を行っておりますが、当海蔵文庫が全国二十六文庫と共に助成を受けることに決定しました。三月末日の贈呈式には、太田理事長が上京し、出席することになっています。

ところで、助成を受けますと、新しい図書の購入や古い本の買い替え、それに伴うラベルやカードの張りかえ等、いろんな作業が待っております。かなりの労力が必要かと思われます。

そこで、こうした活動に参加いただける方（運営委員）を探しております。ご協力いただける方、是非ご連絡下さいませんでしょうか、お待ちしております。

運営委員会では、他の優れた子ども文庫の視察に行ったり、専門家の指導を受けたりしながら海蔵文庫の方向づけをしつつ、作業を進めたいと考えています。

また、作業終了後は、通常の図書の貸出し、閲覧の他、読み聞かせをしたり文庫まつりを実施するなど、文庫として子どもの育成に携っていただくことになるでしょう。

財団からの助成を機に一層の充実を図りたいと、太田理事長はじめ関係者は期待しております。

連絡先　海蔵地区市民センター
TEL(33)0473